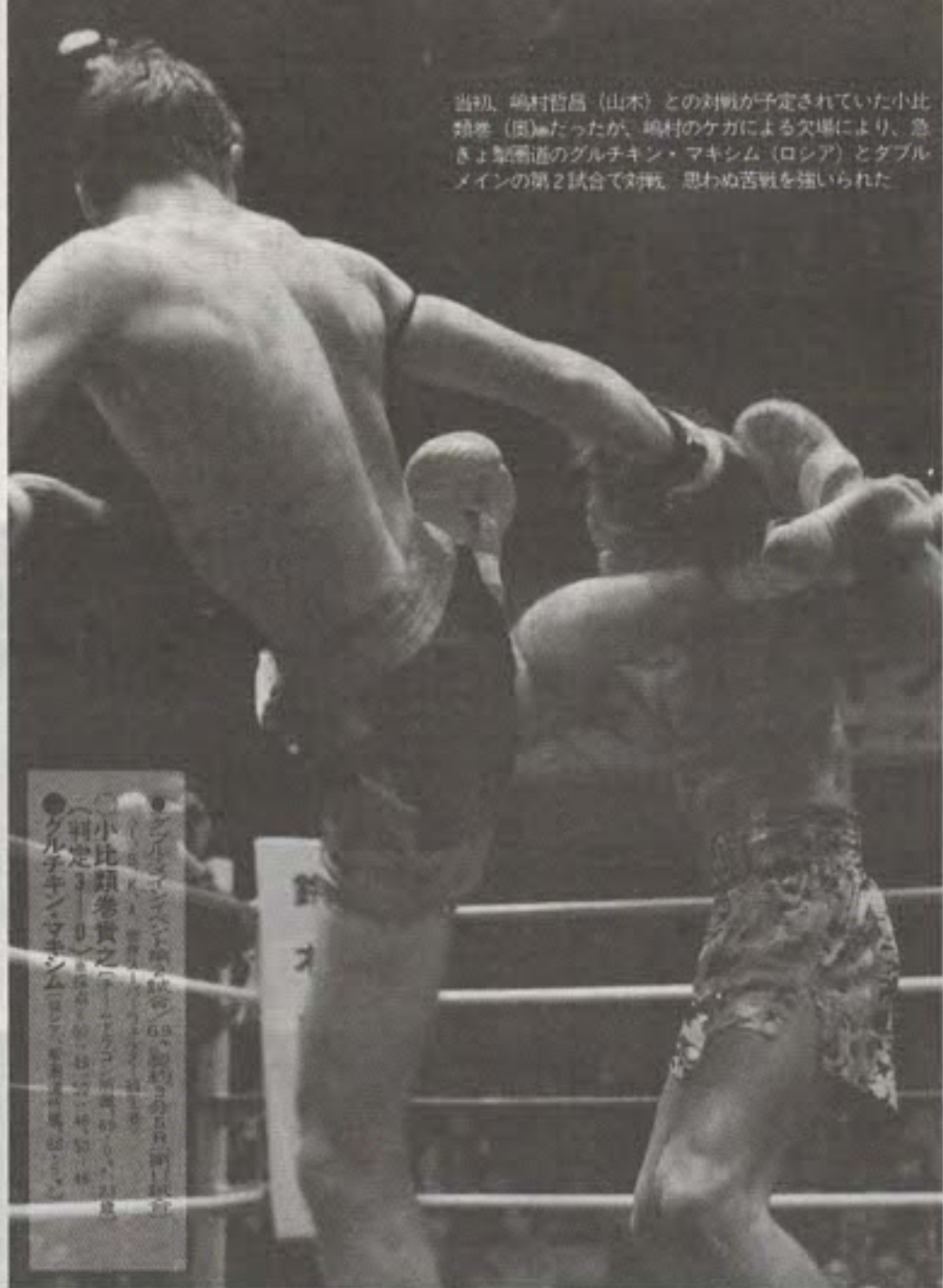


# さらば、タイオイルの匂い

当初、嶋村哲昌（山木）との対戦が予定されていた小比類巻（田）だったが、嶋村のケガによる欠場により、急きょ加那那道のグルチキン・マキシム（ロシア）とダブルメインの第2試合で対戦。思わぬ苦戦を強いられた



●小比類巻は、この大会で初の海外遠征。6月20日の金沢久幸戦へ駒を進めた。この大会は最近のボクシングのビッグマッチ形式に則り、メインのあとにも試合が組まれた。最終試合（第13試合）はグライガンワン（右・タイ）VS木村光（土連）。結果的に3-0の判定でグライガンワンが勝ったが、中盤までは木村のプレッシャーの前に「日本人キラー」は押されっぱなしだった



●今大会のベストマッチはマグナム酒井（右・土連）VS東金ジャガー（東念）の一騎打ち。フルに打ちつ打たれたの攻防を繰り広げた末にドロー。再戦を望みたい



●ダブルメインの第1試合に組まれたヌンサヤム・ヤマキ（奥・山木）VS五十嵐ヨシユキ（アクティヴJ）の一戦は、2R1分55秒、右ヒジがカウンターでヤマキのKO勝ち。賞状を見せた



●J-NETの西山誠人をKOで撃破。大いに株を上げた井上哲（左・山木）は東念外人軍団の小次郎（東念）と激突。西山戦に比べると動きが重かったが、チャンスと見るや、左右のフックを決めて3-0の判定勝ち。5月20日の金沢久幸戦へ駒を進めた。この大会は最近のボクシングのビッグマッチ形式に則り、メインのあとにも試合が組まれた。最終試合（第13試合）はグライガンワン（右・タイ）VS木村光（土連）。結果的に3-0の判定でグライガンワンが勝ったが、中盤までは木村のプレッシャーの前に「日本人キラー」は押されっぱなしだった



この日の大会は好勝負の連続。同じ中量級のカテゴリに属するマグナム酒井と東金ジャガーは、いづれどちらが倒れてもおかしくないほど激しく打ち合った。ほぼ同時に片ヒザがつくほどのパンチの合い打ちもあったほどだ。

酒井やジャガーとは対照的に期待外れだったのは、小比類巻。無名のロシア人を相手に不完全燃焼の判定勝負を演じてしまった。実をいうと、試合の1週間前に小比類巻は右拳を負傷。手負いの状態で試合を余儀なくされた。出場を辞退しなかったのは、フリーという立場を考えたからだ。

アクシデントは続く。試合前日には対戦相手も変更。おまけにマキシムには小比類巻と打ち合う気などサラサラなかった。前に出てこない相手をKOする作業ほど難しいものはない。のちに小比類巻が「やりづらかった」と打ち明けたのも頷ける。

これだけマイナス要因が揃っていたのだから、気の毒といえは気の毒だが、ある関係者は「相手が弱いと思ったら、小比類巻は攻撃を出しかけていても辞めてしまうクセがある。おそらくきれいに決めたかったんでしょう。ガムシヤラに倒しにいけないところが彼の欠点」とスバリ指摘した。

小比類巻も試合内容には、全然納得していない様子。控室では「これで満足していたら、日本のキックは終わり」と吐き捨てた。奇しくも、この日のMAのリングには、ライバルの魔装斗がいた。マイクを持って魔装斗に毒付いた土井広之の姿もあった。壮絶なボスト伊藤を巡る争い。すでにK-1を軸とした、中量級の新たな闘いは始まっている。

（布施）